平成２１（２００９）年２月１日発刊

南極ＯＢ会　会報

Ｎｏ．６

発行　南極 OB 会
会長　川口貞男
編集　広報委員会

目　次

表紙写真　第５０次隊壮行会・・・・・・１
南極ＯＢ会の運営基礎固め進む・・・・・２
—ＯＢ会総会で１年を総括—
一般報告　運営委員長
委員会報告　広報委員長、観測 50 周年継続委員長、アーカイブ委員長
07 年収支決算報告　会計担当、会計監査
新運営委員長、新運営委員会構成メンバー
09 年度活動計画、会則運用規程の改正
第５０次隊壮行会開く・・・・・・・・・・５
—異例事態跳ね返す決意—
南極関連情報・・・・・・・・・・・・・・・６
第 51 次隊長に本吉氏、無人機観測飛行に成功、「しらせ」解体へ、ペンギン会開催、新しらせに宗谷の絵を寄贈、新「しらせ」艤装工事順調、「宗谷」奄美の本土復帰時に活躍、変貌する昭和基地、極点旅行４０周年の集い、盛大に
国立極地研究所の移転・・・・・・・・・・８
—平成 21 年 4 月より立川へ—
特別寄稿　昭和基地訪問の印象・・・・１０
今井通子先生のプロフィール
連載　支部便り⑤　（山陰支部）・・・・１２
連載　「時は巡り」④・・・・・・・・・１３
私と南極記録　大瀬正美
１月１４日はタロ、ジロ発見５０年でした
会員の広場・・・・・・・・・・・・・・・１５
受賞、童話賞佳作入選、松浦利光さん出版
広報委員会からのお知らせ・・・・・１６

第５０次南極地域観測隊皆さんの壮行会（谷垣禎一さんが記念写真に参加　前列左から４人目）

南極ＯＢ会の運営基礎固め進む
－ＯＢ会総会で１年を総括－

２００８年度南極ＯＢ会総会と第５０次隊の壮行会が、２００８年１１月２７日（木）夕、東京文京区湯島の東京ガーデンパレスで開催された。

総会は午後６時から、白壁弘保運営委員が進行役で始まり、まずこの１年間に亡くなった守田康太郎、鳥居鉄也、吉川虎雄氏ら物故者に黙祷を捧げた。
川口貞男会長は次のように開会の挨拶を述べた。
村山先生が亡くなった後会長を引き受けて、今回が２度目の総会になる。前回は、１つは会員の名簿をきちんと作ろうと申し上げた。また南極観測５０周年記念事業の継続事業をどう展開するか。その１つは観測の歴史を残すアーカイブ資料の収集事業で、形ができてきた。もう１つは地方で講演会などを開き、その賛助をしようということだ。南極教室もあらためて力を入れることになった。会報は軌道に乗り、５号まで出た。通信費は初年度は８３０名ほどの方が応じてくれて、そのお金で事務費や会報の費用がまかなわれている。さらに発展をしたい。
会長はこの後議長に松原廣司氏を議長に指名し、議事に入った。

〔一般報告〕

渡辺興亜運営委員長

南極ＯＢ会は４年前に発足した。はじめの２年間は５０周年記念事業に集中した。続く０７～０８年の２年間の運営委員会は、ＯＢ会の基礎固めの時期であった。
特に０８年は、ＯＢ会の運営に関わる様々な事柄のルールを確立し、具体化した。毎月第３木曜日に運営委員会を開催したが、これは広報委員会、アーカイブ委員会、５０周年事業継続委員会の合同委員会で、その議事録は翌月には支部にも伝え、オープンで明快な運営を図った。
５０周年事業継続委員会の継続事業については、後で国分委員長が報告する。
２０００名を越える会員の名簿をしっかりさせることに力を注いだ。さらに現在全国に１５支部があり、各種の企画があるのでその賛助をすることにした。
連絡や名簿つくりにはＩＴ機能を活用すべくＩＴ委員会を作り、体制を整備した。
南極教室は運営の指針や規約を明確にして、一般市民の要望にこたえる形が整った。
アーカイブ事業は具体的に実施する段階に来た。どのような形で展開するか、方針を定めた。
以上のようにこの１年間で、ＯＢ会の基礎的な組織作りや運営のルールなどを作ることが出来た。

総会の模様

〔各委員会報告〕

深瀬和巳広報委員長

広報の主な任務は会報発行とホームページの充実にある。会報は０７年１０月に第１号を発行し、０８年１１月に５号まで来た。１年ちょっとで５回発行は少しハードだった。１年に３回発行の計画で、初年度が後半からの活動だったので、こういう過密な結果になった。０９年１月か２月に６号を出せば、２年間で予定通り６回発行したことになるので、０９年度からは間隔が軌道に乗り、５月、９

月、翌年１月くらいの間隔になるだろう。
予算の関係で、毎号１６頁、そのうちカラーは４頁を原則としている。第２号では規約や役員名簿等を「付録」としたが、今後も必要な資料はこの方法を使う予定だ。
初めてのことで、編集だけでなく、配布先の住所・名簿の充実、印刷所との友好関係、発送作業の基礎作り等いくつも課題があったが、多くの方たちの協力でようやく軌道に乗ってきた。今後とも投稿その他ご協力のほどをお願いする。
毎号通信費のお願いを同封している。こちらの方もよろしくお願いしたい。

国分征南極観測５０周年継続委員長

５０周年継続事業として、アーカイブ事業の推進、講演会活動等支部事業の賛助および懇話会の開催を計画した。
１、アーカイブ事業の詳細については、小野委員長から報告される。
２、南極観測およびその啓蒙活動関連の支部事業については、２００９年度は５０万円程度の予算規模で、３～４件を支援することとし、すでに応募を受け付けており(付録６頁参照)、山陰支部への賛助が決定している。
３、〔南極の歴史（仮）〕懇話会を開催することとし、その１回目として、南極点旅行４０周年記念講演会を２００９年３月１４日に日本大学理工学部工学部１号館で行うことを計画している。予定する講演内容は

司会	（渡辺興亜）
講演　５次隊７５°Ｓへの道	（川崎　巖）
ＫＤ６０の昭和基地揚陸	（松浦光利）
プラトー基地への旅	（吉田栄夫）
極点旅行	（藤原健蔵）

小野延雄アーカイブ委員長

アーカイブ委員会は、南極観測の歴史を残す資料収集を志し、１０月に資料の保管と整理作業の場を確保して活動を開始した。
その概要はＯＢ会報№.５に掲載したが、編集時に文章の欠落等があったので、その訂正を中心に報告させていただきたい。
受入れ資料は、（１）隊次別の公用資料、隊内資料、私的資料、（２）隊次を超える観測事業資料、（３）物故ＯＢ会員の遺族からの一括寄贈資料などに大別できる、としたが、この（３）が欠落していた。
また、提供資料の受入れに関する基本方針として５原則を掲げたが、その番号が会報では重複している。
（注）南極ＯＢ会報№.５の３～４ページ「南極観測の歴史を残す資料集め」は、記事の一部欠落や番号の重複など、広報の見落としでアーカイブ委員長の報告のようにミスがありました。第６号の付録５頁の「南極観測の歴史を残すアーカイブ資料収集事業の基本計画」を参照にしてください）
アーカイブ委員会は、他機関（大学・博物館等）に既存のアーカイブ資料またはそれに準ずる資料の所在情報の収集も目指しています。ＯＢ会員の皆さんには、各隊次資料の収集整備に加えて、貴重な資料の所在情報の提供にもご協力をお願いします。

〔０７年会計収支決算報告等財務関係〕

増田博会計担当

１、はじめに２００７年１１月１日～２００８年3月３１日の「**２００７年度収支決算**」を別紙（付録１頁）の通り報告する。会報第４号に速報報告したので詳細説明を省略するが、立ち上がりの半年であり、８００名弱から通信費のご協力を頂き、５ケ月の活動であることから、当然大幅な残額発生となった。
この余力を活用して２００８年度で事務室・ＩＴ関係基盤整備を行い、今後のスムーズな運営に繋げることとした。
２、次に２００８年4月1日～２００９年３月３１日の「**２００８年度収支見通し**」を別紙（付録３頁）の通り報告する。
「２００８年度収支計画（案）」だったかもしれないが、すでに年度当初から８ケ月も経過しており「予算（案）」もおかしいので、若干工夫して「収支見通し」とした。
上部横細線から上２行の収支項目は“２００７年度の引き続き版”と理解していただければ分りやすい。
２００８通信費以下が“２００８年度版の施策等”であり、８００名からの通信費協力を前提にこれまでの実績をベースに見直して支出見通しとした。２００８年度版の収入の範囲で、プライマリーバランスを意識した支出を厳守する運営に心掛けている。

大久保侃監事の監査報告

短い年度でしたが、監査楚結果、適正に執行されておりましたことをご報告いたします。（付録２頁参照）

新運営委員長指名

川口会長は、新運営委員長に松原廣司氏（２１次）を指名した。松原氏は次のように挨拶した。

「渡辺委員長の後を継ぐのは辛いところだが、ＯＢ会活動をさらに充実させるため皆さん方のご協力を頂きたい」。

２００９～２０１０年度の

新運営委員会構成メンバー

松原新運営委員長は、次期運営委員を次のように発表した。

運営委員長　松原廣司（２１次）

運営委員　　　　　　　（担当事項）
竹内貞男（１０次）新任　設営連絡、隊次連絡
白壁弘保（１１次）総会、壮行会、ミッドウインター祭
芦田成生（１１次）記念品管理
西尾文彦（１７次）総会、壮行会、ミッドウインター祭
神田啓史（１９次）極地研連絡
阿保敏広（３５次）ホームページ管理
田中洋一（３６次）新任　　会計
藤田　建（４５次）新任　　総務

小野延雄（３　次）副会長、「宗谷」連絡
久松武宏（艦　長）副会長、「ふじ」「しらせ」連絡

（事務局）
長谷川慶子　　　　　　　　事務局庶務

０９年度活動計画

松原新運営委員長は次のように発表した。

・ＯＢ会報の発行（年３回）、ホームページの充実
・総会、壮行会、ミッドウインター祭開催
・５０周年継続事業
　（１）アーカイブ事業の推進
　（２）支部事業（講演会等）の賛助
　（３）「南極の歴史（仮題）」懇話会の開催（年２回予定）
・南極教室

０９年度予算案

増田博会計担当が次のように提案した。

２００９年４月１日～２０１０年３月３１日の「２００９年度予算案」を別紙（付録４頁）の通り提起します。やっと分りやすい予算案ができた。８３０名からの通信費のご協力をいただけることを前提に、それを２００９年度収入源として運営すべく計画した。現在の活動をベースに考えるとすれば、今後のＯＢ会運営の目安的な収支レベルに近い計画ではないかと考える。

会則運用規程の改正

小野延雄運営委員が「会則運用規程」の一部改定を次のように提案した。

運用規程第４章第５条の「総会は、観測隊壮行会の日に開催する」を「総会は、ミッドウインター祭の日に開催する」と改正したい。その理由は、第６条で「本会の会計年度は４月１日から翌年の３月３１日とする」となっているのに、１１月の壮行会の日の総会では、年度が半分も過ぎた段階での審議となり、現実的でない。ミッドウインター祭が毎年開催されることを前提に６月に総会を開き、前年度の収支報告をし、新年度予算を正式に決めるようにしたい。

運用規程の変更は、第１３条で「運営委員会で審議し、総会の承認を得て行うことができる」となっており、この提案は拍手で承認された。この日から施行される。

以上で総会は終了した。暫時休憩の後第５０次隊の壮行会となった。

第５０次隊壮行会開く
－異例事態跳ね返す決意－

ＯＢ会総会終了後、同じ部屋で第５０次隊の壮行会が行われた。
この隊は､新砕氷船の就航が間に合わないため、オーストラリアの砕氷船オーロラ・オーストラリス号で昭和基地に向かうという日本の南極観測始まって以来の変則異例事態で、１２月２５日成田空港発、同３０日フリマントルを同船で出発、昭和基地に向かう計画。昭和基地での作業期間は例年より短く、夏隊の帰国は２月２４日の予定。セールロンダーネ調査隊６名は１１月１６日に先発、活動中で、この船で出発するのは小達恒夫隊長以下４０名（うち越冬隊は門倉昭越冬隊長以下２８名)。

壮行会は西尾文彦運営委員の司会で開会。川口貞男ＯＢ会長は次のように挨拶した。

「５０次隊の皆さんは、新しらせの就航が間に合わず、オーストラリアの砕氷船で出かけることになった。この船は『ふじ』に近い能力があり、オーストラリアは南極のベテランぞろいだから安心している。私が最初に越冬した３次隊の輸送量は５７トンだった。それで１４人と５匹の犬が越冬できた。５０次隊は大丈夫だ。大いに活躍してきてください｣。

川口ＯＢ会長のご挨拶

来賓の挨拶は、元南極地域観測統合推進本部委員（元文部次官）の三角哲生さん、「しらせ」の初代艦長の佐藤保さんから戴いた。乾杯の音頭は､１次から参加され８７歳の長老楠宏さん。「５０次隊の皆さん、ご来賓の方々、シンパの方々、ＯＢ会の皆さんの健勝を祈ります」で一同乾杯。

支部関係では北海道支部長山崎道夫さん（９次)、茨城支部藤田建さん（４５次)、阪神支部長林原勝美さん（２５次）ら、韓国極地研前所長Ｋｉｍ　Yeadon（金禮東）さんや昭和基地を訪問したことがある女性登山家今井通子さんらが続き、財務大臣時代に新しらせの予算化を実現した谷垣禎一さんは「主計官を呼び“継続は力なり”と伝え、予算をつけた。今回の５０次という数字は感激した。南極観測も業績を重ねていくことが大事なことだ」と延べ、５０次隊を激励した。

この後昭和基地で越冬中の第４９次隊牛尾収輝隊長からの祝電が披露された｡｢本日、壮行の宴を迎えられたことを心よりお慶び申し上げます。限られた時間の中で、前例のない取り組みを含めて多数の準備を着実に進めてこられた第５０次観測隊並びに国内関係機関の皆様方に深く敬意を表します。先発されたセールロンダーネ調査隊が南極行動中の今、私共もオペレーションの完遂を願いつつ支援に当たります。（中略）新年にお会いできる日を心待ちにしております｣。

最後に出発する５０次隊の皆さんが夏隊、越冬隊の順で壇に上がり隊長の決意表明、隊員が一人ずつ氏名と担当を述べ、激励の拍手を浴びた。

小達隊長は「日本の観測隊始まって以来のピンチだ。オーストラリアの船での昭和基地接岸は考えておらず、基地北方５０マイルあたりで空輸を開始したい」と述べた。また門倉越冬隊長は「昭和基地の火を消さぬよう、精一杯の努力をします」と力強く決意を述べた。

隊員の平均年齢は３７歳、２０台はいなくて一番若い人は３０歳、最年長は５１歳、ということだった。

柿沼清一さん（２次）の指揮で万歳三唱をして、閉会した。

南極関連情報

第５１次隊長に本吉氏

１２月１日の南極地域観測統合推進本部総会は、０９年１１月に出発する第５１次南極観測隊長（兼夏隊長）に国立極地研究所副所長の本吉洋一教授（５４）を、副隊長（兼越冬隊長）に同研究所の工藤栄准教授（４５）を決めた。本吉隊長は地質･岩石・鉱物学、工藤副隊長は水圏生態・植物生態学が専門。

５１次隊は新造の「しらせ」の処女航海で南極に向かう。

無人機観測飛行に成功

昭和基地で越冬中の４９次隊が、無人飛行機を使った長距離の気象観測に成功したと、１２月２５日国立極地研究所が発表した。自動で飛んで帰ってくる小型機で、気象条件の厳しい南極で１１０㌔を飛んで観測に成功したのは世界でも初めてだとのこと。

全長は２㍍、翼長２・６㍍、気象観測装置と燃料を含めた重さは約２０㌔。１８日に手動で離陸後はプログラム通り１１０㌔を自動フライト、高度１０００㍍までの気象データを観測し 1 時間後に戻った。（朝日新聞による）

「しらせ」解体へ

昨春引退した第３代南極観測船「しらせ」は、０８年１０月２４日の南極地域観測統合推進本部の連絡会で、解体することに決まった。保存し活用することを目指していたが、改修や維持に多額の費用がかかることから、引き取り手が見つからなかった。

「しらせ」を保存したいと、南極探検家白瀬矗（のぶ）氏の出身地である秋田県にかほ市や、南極観測開始時に犬そりの訓練地だった北海道稚内市などが名乗りを上げた。しかし多額の資金の目途が立たず断念。その後民間による保存活用先を探し、いくつかの申し出があったが、同本部の「後利用に関する検討委員会」は、保存・活用は不可能との結論を出していた。スクリューなどの船体の一部は、海上自衛隊佐世保史料館や、立川に移転後の極地研究所で保存することを検討する。

なお初代の「宗谷」は東京･品川区の「船の科学館」に、２代目の「ふじ」は名古屋港にそれぞれ保存展示されており、３代目「しらせ」の解体処分は、初めてのこと。

ペンギン会開催

第２代観測船「ふじ」のＯＢ会「ふじＯＢ会」(通称ペンギン会）が、今年も１１月１５日（土)、繋留されている名古屋港の「ふじ」で開催された。

第１４回ペンギン会でご挨拶する松浦元艦長

代表の松浦光利元艦長は今年８９歳。｢１００歳まで生きることにしているので、毎年名古屋で会いましょう…」と挨拶された。元部下一同、元艦長の気迫に圧倒されて､｢生きている限り参加します…」と答えていた。

参加者の紅一点、７次から１３次まで南極向けに短波放送をしていた元日本短波放送のアナウンサー青木美香さんは、相変わらずウグイスのような美声で「観測隊の皆様、ふじ乗組員の皆様…」を再現してくれた。

来年松浦艦長は９０歳。卒寿記念ではあるが、松浦艦長からは特別な配慮は不要とのお達しだった。

第５０次隊昭和基地到着

第５０次隊は、平成２１年１月１３日までにオーストラリス号からヘリコプターによって全員無事に昭和基地に到着した。

新「しらせ」に「宗谷」の絵を寄贈

舞鶴市余部のユニバーサル造船舞鶴事業所内で建造中の新砕氷船「しらせ」の艤装員長小梅三津男一等海佐（艦長予定者）に０８年１１月１７日、油絵「暴風圏を進む宗谷」（Ｆ６号）が、制作者深瀬和巳南極ＯＢ会員（３次）から贈呈された。

新しらせに寄贈した「暴風圏を進む宗谷」（Ｆ６号）

同事業所内艤装員事務所前の広場に海上自衛隊の艤装員が整列する前で、深瀬氏から小梅一佐に額縁に入った絵が手渡された。この絵は新「しらせ」内に飾られ、南極に向かう予定。

この計画は、南極観測５０周年記念事業の一環として新造船「しらせ」に、観測初期の頃苦闘した「宗谷」の絵を贈ろうというもので、０６年１１月、５０周年記念式典が行われた際川口貞男南極ＯＢ会会長が横須賀に停泊中だった先代「しらせ」（０８年春引退）の船上で、目録を贈呈していた。それ以来久松武宏ＯＢ会運営委員（元しらせ艦長）が海自側と連絡を取り、新船建造の進み具合を見ながら日取りを決め、この日の贈呈式には深瀬、久松両氏が出席した。

左は小梅三津男次期艦長、右は贈呈者深瀬和巳氏

この絵は、０５年５月、東京・京橋の画廊で深瀬氏が開いた個展に出品されていたもので、会場を訪れたＯＢの方たちが“初心忘するべからず”と新「しらせ」に贈呈することを決めた。

新「しらせ」艤装工事順調

油絵を贈呈したあと、深瀬と久松の両名は、ユニバーサル造船の「しらせ」建造プロジェクトリーダーの佃洋孝氏を同造船事務所に訪問した。佃氏から、新「しらせ」の性能や艤装工事の進み具合などを伺った後、艤装埠頭で完成を急いでいる新造船を案内して頂いた。

佃氏の「宗谷以来半世紀にわたり日本の南極事業に関係してきた当社は、何としても優秀な新船を建造し、活躍してもらいたい」との決意が頼もしかった。徹底した環境対策、運搬する荷物のコンテナ化、５６個のコンテナ積載、コンテナ用に２基のエレベーター設置、パントリーを中心に隊員用、乗員用の食堂を配置、隊員の２人部屋にはパソコン端末、ゲスト用個室、船体は丸い外観だが喫水線以下は鋭角構造、舳には氷上の雪を融かすため海水を散布する放出口２０個等、新機軸がたくさんあるが、ここでは書ききれない。

基準排水量　１２，５００トン（１１６００トン、以下括弧内は旧しらせ）
全長１３８ｍ（１３４ｍ）、最大幅２８ｍ（同）、深さ１５，９ｍ（１４，５ｍ）、喫水９，２ｍ
速度１９ノット（同）、主機関ディーゼル機関４基、推進電動機４基、軸馬力 30,000 馬力、軸数は旧しらせ３、新しらせ２
定員：乗員１７５名、隊員８０名。
完成２００９年５月。

「宗谷」奄美の本土復帰時に活躍

東京新聞の１２月２５日付け紙面に、１９５３（昭和２８）年１２月２５日に本土復帰した奄美諸島に、米国統治中に使われていた軍票「Ｂ円」を日本円に交換するため「宗谷」が９億円などを運んだ話が紹介されている。

この話を知らせたのは、鎌倉市在住の島岡稔さん（６７）で、当時奄美大島に住んでいた。復帰の４日前の１２月２１日に名瀬に入港する「宗谷」を見に行ったという。中学生のブラスバンドが「君が代」を演奏し、島民

が日の丸を振って大歓迎した。
　当時「宗谷」は海上保安庁の灯台補給船で、門司港で輸送の命を受け、鹿児島港経由で奄美に向かったが、警察官の２４人、日銀の１５人ら９０人が乗り込み、現金や切手などが入った約８０個の箱を積み、厳戒態勢が敷かれた。「宗谷」は名瀬の後本島南部の古仁屋や喜界島、徳之島を回り、２９日に鹿児島に帰っている。

変貌する昭和基地

　一昨年２００７年は，日本の南極観測５０年目の年。この記念すべき年の越冬観測を担ったのが第４８次越冬隊で、昨年３月に帰国した。宮岡宏越冬隊長は「極地研ＮＥＷＳ」１８７号（９月発行）に「５０年目の昭和基地越冬を終えて」と題して越冬報告を書いている。その中で施設面について書いている「変貌する昭和基地」の項目の概略を紹介する。
　第１次隊の４棟（１７４㎡）から、昨年第４８次では計６１棟（6.８２１㎡）と約４０倍の面積に広がった。加えて、貯油タンク、燃料パイプライン、通信・観測用アンテナ、ヘリポートなど多くの設備が東オングル島全体に点在する。昨シーズンも体育館並みの大きさの「機械建築倉庫」を建設した。従来、倉庫スペースの不足から、せっかく搬入した機械建築部品が「屋外デポ」され、結果的には廃棄物になってしまう恐れがあった。新倉庫は効率的で無駄のない昭和基地の資材管理に活用されることになろう。
　貯油、送油、発電システムは、南極基地にとって最重要設備である。昭和基地では、安全な燃料備蓄に向けて金属タンクを増設するとともに、タンクから基地発電棟までの燃料油送配管の更新を第４３次隊より計画的に進めてきた。昨年、全区間の工事がほぼ完了し、試験油送を開始した。厳冬期に一部不具合が見つかったが、２重配管のお陰で一滴も外部に漏らすことなく送油でき、不具合箇所は第４９次夏期の修理作業で対策を完了した。

極点旅行４０周年の集い、盛大に

　村山雅美隊長ら１１人の極点旅行隊が南極点に到達したのは１９６８年１２月１９日。その４０周年を記念する集いが２００８年１２月１９日、９次隊員やその家族、極点に出迎えた報道記者ら３０人が参加して、伊豆・初島で開かれた。極点旅行の集いは毎年のように開いているが、４０周年とあって初の『海外旅行』を企画。熱海から３０分余の船旅を楽しんだあと、島一番の豪華ホテルで大宴会。極点旅行隊の歌を合唱したり、「あのとき村山隊長は怪我して基地に戻った隊員の交代をなぜしなかったのか」などをめぐって大いに盛り上がった。　　　　　　(柴田記)

国立極地研究所の移転

平成２１年４月より立川へ

神田啓史（極地研　24、29 次越冬、19、37、45 夏隊）

　国立極地研究所（以下、極地研）の移転計画が浮上したのは今から２０年も前の昭和６３年であった。「国の行政機関等の移転について」の閣議決定により、極地研は統計数理研究所、国文学研究資料館とともに移転の対象機関となり、移転先は立川市に決定した。すでに平成２０年２月には人間文化研究機構の国文学研究資料館が移転を終えている。情報・システム研究機構に属する極地研は平成２１年４月以降、統計数理研究所は１０月以降に、上記の国文学研究資料館と合築の形で同じビルディングの中に移転することになった。
　極地研は南極観測事業の中核機関として、立川市においても事業および研究活動を継続していく事になるが、平成２１年２月末日に建物の引き渡しが行われ、４月移転に向けて準備が行われている。極地研が入居するビルディング全体は総合研究棟と呼ばれるが、ここで、極地研の新研究棟・極地観測棟の概要

を紹介したい。

写真１．総合研究棟：極地研が入居する新研究棟は西側（写真奥）。写真は 12 月 11 日現在

極地研の総面積は研究棟 16,105 ㎡、極地観測棟 4,947 ㎡で、合計 21,052 ㎡（野外施設は含まない）であり、現在の板橋区の面積の約１．７倍となる。研究棟は地上６階、地下１階建である。地下１階は低温実験室、計算機室等の大型設備が入り、１階は地圏研究室・実験室､及び図書室、２階は所長室、管理部、３階は北極観測センター、極域研究資源センター、国際企画室、プロジェクト研究室･実験室、４階は宙空圏、気水圏、生物圏研究室・実験室、５階は極域データセンター、資料保管庫、教員室、大学院生室、６階は基盤研究グループ室及び教員室等となっている。

写真２．極地観測棟：作業室、機材保管庫、倉庫等は南側（写真左）、隊員事務室、南極観測センター等は北側（写真右）。写真は 12 月 11 日現在

極地観測棟は南極、北極観測に関わる事業を推進するために、南極観測センター、隊長室、隊員事務室、作業室、観測機材保管庫、倉庫などが入居する３階建の建物である。極地観測等に隣接した野外施設としてトレーニングフィールド、コンテナヤードなども整備されている。新極地研に新たに加わった特色はこの独立した極地観測棟と野外施設といってもよいであろう。立川移転という新しい時代の幕開けは同時に、それ以前の歴史的資料をどのように扱うかの課題も含んでいる。とくに移転を機会に重要なアーカイブス資料が散逸してしまうことがあり、極地研では緊急課題として､「移転に伴う文書、物品のアーカイブス取り扱い」のワーキンググループを設置して対応している。

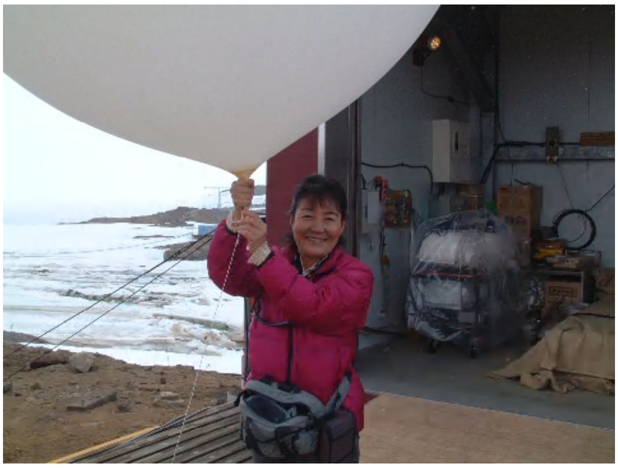
将来計画としてはゲストハウス等の交流棟Ⅰ、展示施設、アーカイブス資料室、食堂等を整備した交流棟Ⅱを建設する予定であるが現在、概算要求の段階である。とくに、交流棟Ⅱはこれまでに極地研で保管されていた資料や南極 OB 会等が収集しているアーカイブス等、南極観測５０年の歴史資料の保存と、南極事業を広く国民に知ってもらうための施設として建設が切望されている。

なお、
新極地研の所在地は
〒190-0014　東京都立川市緑町１０－３
交通アクセスはＪＲ中央線立川駅乗り換え
多摩都市モノレール高松駅下車、徒歩７分

特別寄稿

昭和基地訪問の印象

今井通子



高層気象観測用バルーン飛揚の手伝い　筆者

　南極地域観測と私の関わりは、間接的ではありますが、１９９７年～２００４年国立極地研究所評議員、１９９８年～２００７年文部科学省研究開発局海洋地球課南極地域観測統合推進本部委員を務めさせていただいた事と、“日本南極地域観測５０周年記念オープンフォーラム南極”のために、この記念イベントの出演者である毛利衛・立松和平両氏と私が、２００７年１月３日から２０日の日程で南極昭和基地に伺わせていただいた事です。（この旅団の構成は、国立極地研究所副所長の本吉洋一氏を隊長とし、他に日本科学未来館館長の毛利氏の助手として同館の寺嶋加奈子氏、取材のためNHKから勝間田智之氏で、総勢６名でした。）昭和基地での滞在は７日間という短期間でしたが、今般、２００８年１１月２７日に東京ガーデンパレスで開催された“南極OB会総会及び第５０次南極地域観測隊壮行会”の御案内をいただけ、出席させていただく事になった経緯は、昭和基地へ伺えたからかと思っております。（但し、昭和基地への入島経緯がOBの皆様方とは異なるため、賛助会員としてとの御説明もいただきましたが。）次に、今回本誌に執筆させていただく事になった理由は、OB 会の懇親会時、数分のスピーチをさせていただいたところ、内容が、どうもOB会の皆様方とは異なる視点だったようなので。

　という事で、以下に私が感じた昭和基地について少々記させていただきます。

隊員の皆様の昭和基地での生活、観測、研究等については、上記委員でしたので、毎年数々の御報告を受け、写真も数々目にしていましたので、まずヘリポートに降り立った瞬間、ここが厳しい自然環境下で学研の殿堂として、人間が活動している基地なのかと感動。次に、剥き出しの岩盤上に膨大な数のドラム缶、各種アンテナ郡やドーム、と大小の形も不揃いな建物たちの点在を目の当たりにし、何らかの理由で地球全体が焦土と化した後、生き残った科学者らが通信だけを頼りに宇宙のどこかに救いを求め、建造物を作り上げている未来基地、のような設定の映画のワンシーンを見る思いでした。車で移動しながらは、工事現場のようだとも感じました。

　居住棟に案内された私たち本吉隊は、休む間もなく食堂で歓迎会の夕食の席へ。翌日は、早速各研究棟を訪ね、越冬隊の方々がこの一年行なってこられた研究内容や成果などのレクチャーを受けました。（その後の日々は同棟に居る、神山孝吉越冬隊長はじめ、第４７次越冬隊員の方々と食住を共にする事に。）という訳で、昭和基地での隊員の方々との触れ合いと言えば、４７次越冬隊の方々とが大部分ということになるのですが、ここで私はその初日から、この場がとても居心地の良いことに気付きました。まるで以前から一緒に過ごしていたような居心地の良さ、それは、登山隊の隊員たちと数年に渡るチームワーク作りをし、海外各地の高峰の山中で、クローズドな人員と過ごす時の居心地の良さと殆ど変わらない、居心地の良さ。びっくりしました。観察をしてみると、隊員の方々は、いくつかのグループ分けができます。仲間同士の数グループ、ほとんど単独で動く方、でもそのどのタイプの方でも、横断的にコミュニケーションを取っていました。また、一見孤高の人

に見える方も含め、皆様私にとってはとてもご親切で､気配り､気遣いがある友好的な方々ばかりでした。御承知のように隊員は、その仕事内容から、研究者と専門技術系の設営隊員が二分されていますが、そのどちらの方々も、私たちのような第三者に対しては、種々の事柄に対するご説明が懇切丁寧でした。それればかりでは無く、自身の守備範囲である専門分野を越えて、他の分野の方の仕事に精通していましたし、例えば、気象の話を設営隊員の建設会社の方が詳しく説明してくださる隣で､気象の専門家の方がにこやかに頷かれ、会話に参加される。本吉先生の岩石から大陸の移動を証明された業績を語ってくださったのは、調理師さん。などなどでした。一方、建設や通信、ゾンデの放球等研究者が、他の職種について熱く語る場面も多くありました。その上、更に各研究棟では、専門家が全て、私たちが納得するまで各研究の意義を情熱的に語ってくださいました。

１２月から来ている４８次隊の都会的張り切り方と比較すると、そこには明らかな違いが見えました。彼らの姿を見て、その親切心や気配り気遣い、友好的で他人を心地良くする人間性と多岐多様な知識は、過酷な自然と限られた人数で全てを処さなければならない、一年余りという環境から身につけたものではないかと感じました。私たちも例えば吹雪の日、先発隊員は後発隊員に、懇切丁寧にルート状況を伝えます。見えないという相手の立場に立って説明できるのは、自身が見えない苦労を体験し、情報となる事を一つも落さず頭の中にインプット出来ているからできる事です。さらに、伝えた言葉は全て相手に覚えられる訳ではありません。何でもかんでも伝えれば良いという訳でもありません｡例えば、相手がアバウトな人間で、いい加減に聞いてミスるか、または慎重で小心者なので緊張し過ぎて行動が鈍るため失敗するか等々、相手の性格や行動パターンを読んだ上、相手に合わせて強調すべきポイントなども考えてしゃべります。一方相手も、情報の出し手の性格を読んで質問をします。こうしてお互いの安全を図り、仕事をスムーズに終わらせるのです。

私は、今回の体験で、南極地域観測隊は、国家的研究成果ともう一つ、資源の少ない日本で最も大切な、異なる業種や人間性を高レベルで理解し和せる知識と人格を身につけた人材を作り上げる事にも貢献していると感じました。

今井通子さんのプロフィール

１９４２年東京都生まれ。１９６６年東京女子医科大学卒業。医学博士。東京農業大学客員教授。
２００７年３月まで東京女子医大腎総合医療センター泌尿器科非常勤講師を勤める。
東京女子医科大学在学中に山岳部に入部し、登山を始める。
１９６７年女性パーティーとして世界初、欧州アルプス・マッターホルン北壁登攀に成功。
６９年アイガー北壁、７１年グランドジョラス北壁と、女性として世界初の欧州三大北壁完登者となる。
７９年ネパールヒマラヤ・ダウラギリのⅡ、Ⅲ、Ⅴ峰縦走登山隊長として男性１６名を率いてクロス縦走を成功させる。
８５年チョモランマ峰北壁に挑み、冬期世界最高到達点を記録。
２００７年１月、南極観測５０周年記念事業の一環として南極視察団が作られ、毛利衛氏・立松和平氏らと共に南極昭和基地に滞在。
７１年より始め、現在も国内外のトレッキングツアー講師を勤め、また、講演・執筆活動などもこなす。
著書は「山は私の学校だった」(山と渓谷社)など多数。

なお、今井通子さんは‘０８年１２月の南極ＯＢ会運営委員会で「会友」に決まりました。

連載　支部便り⑤　（山陰支部）

山陰支部は会員総数 23 名で 2006 年 4 月 2 日に設立され、会長吉川暢一氏（10 次越冬医療）、幹事大谷修司の体制でスタートいたしました。設立集会の当日は遠方より渡邉興亜氏（元国立極地研究所長）にも参加していただきました。会員の内訳は鳥取県 6 名、島根県 10 名、両県外 7 名であり、南極観測経験者は 20 人、南極未経験者 3 人でした。山陰支部が設立されるまでは一部の南極経験者同士が連絡を取っているに過ぎませんでしたが、支部結成後は、次に示すように講演会などの企画や観測隊の壮行会などを通して、設立以前よりもお互いの交流が深まったと感じております。

2006 年 12 月には南極観測 50 周年にあわせて、南極 OB 会の助成をうけ、山陰支部主催で講演会と展示会を松江市のくにびきメッセで実施しました。渡邉興亜氏を講師にお迎えして、「南極観測の５０年」と題して講演をしていただいた後、山陰支部の 7 名がそれぞれ、自分の専門分野に基づいて講演をしました。講演会と平行して南極の展示会を行い、南極の自然、観測、生活等に関するパネル展示や、南極の氷、地図、岩石標本、海洋生物標本、南極の文献、観測隊に関する資料、防寒具や生活用品などが広い展示場いっぱいに展示されました。親子連れや学生などに興味深く展示を見ていただけたと思います（写真１）。しかし、地元の新聞やラジオ、ポスター等を通じてこの企画を宣伝しましたが、参加者の数は思ったほどのびず、広報の難しさを感じた講演会・展示会でした。

写真１　南極観測５０周年の展示会

2007 年 11 月には、山陰支部の南極未経験者３名のなかから２名が第 49 次南極観測隊夏隊に参加しました。参加されたのは島根大学教育学部高橋哲也氏、生物資源科学部山本達之氏のお二人です。2007 年 11 月には山陰支部で、壮行会を松江で実施し、互いに親睦を深めました。お二人は南極昭和基地において紫外線の皮膚への影響について研究されました。人種や年齢層の異なるヒト皮膚細胞を培養しながら太陽光を暴露しそのダメージを調べたそうです。また、好冷性乳酸菌の採取にも成功されました。

写真２　昭和基地と結んでの公開授業の模様

2008 年 9 月には島根大学教育学部で、教育学部附属小・中学校の子どもたちと保護者を主な対象として、山陰支部共催で南極講演会・展示会を実施しました。講師は 49 次隊に参加された高橋哲也氏で、南極観測隊の活動や南極の自然、実施された研究について小中学生にもわかりやすくクイズをしながら 1 時間の講演を実施されました。講演の後子ども達は、南極の氷山氷をコップに浮かべて空気のはじける音を聞いたり、南極昭和基地との遠隔地公開授業を受けました。昭和基地からは、49 次牛尾越冬隊長、水野隊員（気象庁）、橋本医療隊員が出演され、南極の自然、生活、観測についてクイズをまじえながら興味深い授業をしていただきました（写真２）。

2008 年度から支部活動について南極 OB 会から助成金の公募があり、さっそく山陰支部の成瀬廉二氏（NPO 法人氷河・雪氷圏環境研

究舎）が企画された「南極の自然のふしぎ」展示・談話会を応募いたしました。この助成が認められ 2009 年 3 月に鳥取市において、山陰支部の会員が講師をつとめこの企画を実施する予定になっております。

山陰支部は設立後まだ 3 年を経過しておりませんが、山陰支部の主催、共催によって 3 つの講演会・展示会が実施あるいは計画されております。今後も地道に活動を続け、南極と南極観測の魅力を一般の方々に伝えると共に山陰支部 OB 会会員相互の親睦を図っていこうと思っております。

山陰支部幹事　　大谷修司

（29 次越冬生物、４１次夏隊生物）

連載「時は巡り」④

私と南極記録

大瀬　正美

（１，２，３，７，１９次夏隊、４，８，１２次越冬）

日本の南極観測も５０年の月日が流れ、過去の古い史実は、時代とともに忘れられようとしている。私も現役を退職以来、今までの古い記録の整理を始めたが、新しい南極半島地域の次の南極の仕事が増えると、またその記録が増えて、整理もなかなか進展しないのが実情である。

フィルムによる記録

私は戦前から電離層観測を行ってきた関係から、ことさらフィルム記録に関心が強かった。今思い出してみると、あの過酷な「宗谷」船内のフィルム現像では、暗室で身体を三方にロープで縛っていないと、真っ暗な狭い部屋では、船の動揺が全くつかめず、苦労した。

しかしこのような経験が次の進歩に繋がって行ったのだと思う。フィルムによる記録は貴重である。第１次の時、報道の田英夫さん（共同通信、のち参議院議員）が言っていた「いくら原稿を書いても、一枚の現場記録写真にはかなわない」という言葉を、今でもよく思い出す。

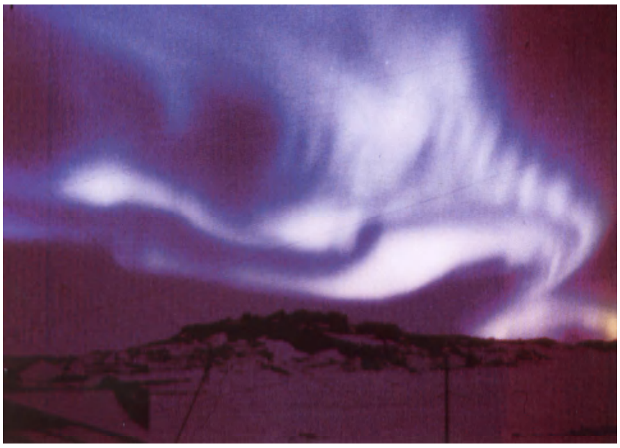
今回は、仕事上関心のあった「オーロラ記録」について書いてみたい。

私が初めてオーロラを見たのは、１次の帰路、氷状悪化により氷海で停船していた昭和３２年２月１８日夜で、「宗谷」上空に、淡黄色で、動きが比較的早いオーロラであった。この時感じたのは、動きと色を、いかに忠実に記録できるか、ということであった。動きについては、当時は１６ミリのフィルムで、感度の点でリアルタイムの記録はまず不可能であった。

そこでスチールフィルムにより色を忠実に再現する方法を考えてみた。そのためには現地でカラー現像することが第一条件であった。帰国後いろいろと調べたが立ち消えとなった。昭和３４年初夏、第４次越冬が決定した時、再びこの問題を考えた。当時内色発光で自家現像できるのは、コダックのエクタクロームしかなく、この処方を調査して、なんとか基地でも使用できることが分かった。しかし国内でテストする時間がなく、結局ぶっつけ本番となってしまい、現像キット E-６を基地に持ち込んだ。

越冬生活に入って、当時は太陽活動度が高くて、３月末頃から毎日のように、動きの早いすばらしいオーロラを記録することができ

た。しかし当時のＡＳＡ２００のエクタクロームでどの程度の露出をかけるか全く分からず、現像をしてできるだけ早く結果を見たかったが、観測業務に追われて現像の準備がなかなか整わなかった。



第４次隊越冬のときのオーロラ

初めて現像結果を見たのは、５月１９日であった。ポジフィルムにきれいなオーロラが浮かび上がっていた。この結果に自信を得て、それからのオーロラ撮影は飛躍的に進歩した。以後２回越冬したが、８次は太陽活動度が最低に近く、１２次は比較的高い活動度であった。現在これら各隊次のオーロラ比較をすると、活動度の影響がよく見られる。しかし、４次のようなオーロラは、その後の観測では見ることができなかった。

新しい南極半島の記録

これら一連の記録は、私自身の人生であり、その記録が次の仕事への基礎となって、また新しい記録が生まれてくるのである。私が勤務した電波研究所の５０周年も、南極観測の５０周年も終わり、一応これらの記録は終了した。

しかしその後、私には新しい南極半島の記録が増加している。この地域の記録は、昭和基地とは全く違う現象である。温暖化の影響で棚氷が無くなったプリンス・グスターフ海峡、植物プランクトンの異常発生で海水が緑色となる海域、沈んだ太陽が再び水平線に緑色で輝くグリーンフラッシュ、上昇気流が強い時のきれいなレンズ雲、氷河の崩落で発生する津波等、現象は様々である。

世間一般の通例では、古い物を懐かしく見るようになると、年をとった証拠だとよく言われるが、私は逆に古い記録を見ることによって、若さを保つような効果があるのではなかろうかと考えている。

いずれにしてもこれらの記録を、今後後世に引き継いでいくためにはどうすべきかを、考えねばならない時期に来ていることは事実である。

１月１４日は　タロ、ジロ発見５０年でした

左からタロと武藤晃隊員、ジロと小口高隊員、新たに連れて行った子犬「ミヤ」と北村泰一隊員
（写真撮影２月１７日　深瀬和巳氏）

受賞

芳野赳夫さんがＩＥＥＥ Laurence G.Cumming Award を受賞

芳野さん（電気通信大学名誉教授）は３次越冬、１７次隊長兼越冬隊長で、０８年８月２１日、デトロイト市でＩＥＥＥ（米国電気電子学会）EMC ソサエティより、最高の栄誉である２００８年 Laurence G.Cumming Award for Outstanding Service を受賞した。芳野教授の過去４０年以上に及ぶＩＥＥＥへの貢献によるもので、３期９年のＥＭＣソサエティの Board of Directors メンバーとしての貢献、アジア･太平洋地区の EMC ソサイエティの調整官として、および東京支部への長年の貢献が含まれているという。

この賞は、EMC(環境電磁工学)の分野で顕著な業績・貢献をなした人にその栄誉を讃える最高の賞で、毎年１名に授与される。佐藤利三郎東北大名誉教授（1987 年）に次いで日本人として２人目。

EMC(環境電磁工学)は、電子機器間の相互電磁干渉の防止・防護、雷などの自然放電からの電子機器の保護、国際間の電子機器の干渉等に対する標準規格の制定などの研究、技術発展、規格設定を行う分野。

芳野さんは３次越冬時、何でも知っている人として「はかせ」と呼ばれていた。設営部門の電気、機械、通信、研究部門の電波工学の担当。越冬中に無線通信の電波と電離層などの観測が干渉し合うのをどうするとか、氷の電気的性質を調査するなどの経験をした。帰国後氷の電気的性格を電気通信学会に発表、その内容がペンタゴンに登録され、1965 年には米国無線学会（IRE、現在の IEEE 米国電気電子学会）のアンテナ伝搬研究会のシンポジウムに呼ばれて講演、これをきっかけに国際的な活動となり、数多くの賞を受けることになった。南極での観測が見事に実を結んだことになる。このあたりのことは、このほど発行された第３次越冬隊の記録「１４人と５匹の越冬隊」８７頁のあたりに出てくる。

１１月の南極ＯＢ会総会で芳野さんが「おい、こんなの貰ったよ」と電気通信大学のニューズレターを見せてくれた。「なに？これ」。“はかせ”ちょっと間をおいて「ノーベル賞のちょっと下くらいかな」。「えーっ！」というわけで説明を聞いているうちに、先日読んだ３次越冬の本の内容を思い出した。南極で５０年も前に端緒をつかんで晴れの受賞。おめでとうございます。

童話賞佳作入選

福谷博さん（９次、１３次越冬、気象）は、１０月に（株）ジャパンエナジー主催の第３９回ＪOMO童話賞の佳作に入選された。全国から８６６１編も応募があった中から選ばれた。題は「パパ南極に行っているの」。娘さんが生後１０ヶ月の時に南極に出かけた越冬隊員が、任務を終え羽田空港に帰国、成長したわが子を抱き上げた時、父親の顔を忘れてしまっている娘さんが不安そうな小さな声で「パパ南極に行っているの」と言う唖然かつほのぼのとした話です。この童話集は、ＪOMOのスタンドにおいてあるそうだ。

松浦光利さん出版

元ふじ艦長の松浦光利さんが、１２月に光人社ＮＦ文庫「海将補（アドミラル）アフリカ奮闘記」を出版された。税込み８３０円。松浦さんは艦長の後横須賀地方総監部幕僚長を経て海上自衛隊を終えた後、国際協力事業団の専門家として６年間にわたりアフリカに海運事業を教えた。その間の記録をまとめられた。現在８９歳、お元気で活躍されている。

山岳賞を受賞

（社）日本山岳会の第１０回（平成２０年度）秩父宮記念山岳賞に、南極ＯＢ会北陸支部の川

田邦夫さん（２５，２７次越冬）、同新潟支部横山宏太郎さん（１４、３５次越冬）、飯田肇さん（南極には関係なし）が「大日岳巨大雪庇の形成機構に関する研究」で昨年１１月選ばれ、１２月６日に表彰された。

訃報

石井　巖　19 年 10 月　　１４次夏隊 測地
富樫昭二　20 年 10 月８日　１４次越冬 機械
神川武久　21 年 1 月７日　宗谷 5,6 次 航海
（年号は平成です）

＊＊＊　広報委員会からのお知らせ　＊＊＊

第６号をお届けします。総会の各種資料を掲載した「付録」が同封されています。年間３号を原則としていますので、丸２年分を終えたことになります。今回から「通信費」納入者にのみ発送し、未納者には送りません。

１月１２日に、南極ＯＢ会のホームページに会報のページを新設し、創刊号から３号まで、つまり最初の１年分を閲覧できるようにしました。南極ＯＢ会ホームページのＵＲＬ（アドレス）はこのページのＯＢ会事務局案内に掲載されています。

なお「会員の広場」をもっと充実させたいと思います。受賞、表彰、住居移転、訃報などを事務局まで連絡してください。また、各隊次の出来事、職場関係ニュースなども歓迎いたします。

艤装中の新「しらせ」　２００８年１１月１７日撮影　（久松武宏氏　提供）

****
南極 OB 会事務局
所在地　〒１０１－００６１
東京都千代田区西神田２－３－２　牧ビル３０１
電話＆Fax　:　０３－５２１０－２２５２
E-Mail　Address　:　nankyoku-ob@mbp.nifty.com
南極 OB 会ホームページ　:　http://www.jare.org /
****